

孫俚工『中国語法講義』に関する一考察

田村 新

A Consideration of SUN Liangong (孫俚工) “Zhongguo yufa jiangyi” (中国語法講義)

TAMURA Arata

摘要

本文以孙俚工1921年出版的《中国语法讲义》和“初期白话文法群”的记述为线索，探讨孙俚工著作特点和价值。该书的确运用了欧洲语言语法研究的成果。但本文认为孙俚工思考记述汉语语法特点，且例句里有方言性词汇。本文考察认为该书具有一定价值，绝对不能轻视。

キーワード：「初期白話文法群」 文成分 代名詞 動詞 時制

0. はじめに

1910年代後半より中国ではいわゆる言文一致運動が起り、1920年代に入ると白話文について書かれた文法著作が多数現れる。本稿ではこれらの文法著作を「初期白話文法群」と呼ぶ。この「初期白話文法群」の時期の特徴は龔千炎1997：3によれば西洋文法の模倣にあるという。

本稿で考察する孫俚工『中国語法講義』（以下本書と略称する）は1921年に亜東図書館より出版された。「初期白話文法群」の中心的な著作である1924年に出版された黎錦熙『新著国語文法』は中国における文法研究学説史の中で管見の限りにおいて漏れることなく紹介され考察の対象となっている。しかし、本書については林玉山1983：85や邵敬敏2006：54において著者である孫俚工の名前と本書の書名のみが紹介され、内容について言及しているものは龔千炎1997：61のみのようである。

本稿は先行研究において取り上げられることの少なかった本書について、その内容

を紹介し、孫俚工の記述を手がかりに「初期白話文法群」の記述と比較対照することで、本書の特徴と価値について考察を行いたい。

1. 孫俚工と『中国語法講義』について

孫俚工（1894-1962）は湖南省隆回の生まれで、1920年に北京高等師範学校国文部を卒業後、長沙第一師範学校にて言語学、文字学、中国文学などを教えた。1924年には日本の上智大学に留学し、帰国後復旦大学中文系教授に就任する。

本書は縦180mm、横125mm、厚さ10mmである。古い本のためなのか筆者が北京某所で購入した時点で、すでに表紙は補強のためか雑紙となっていた。陳望道による序文1頁、力子^[1]による序文2頁、目次4頁、本文168頁からなる著作である。陳望道の序によれば、本書は漳州にある第二師範と長沙の第一師範で試験的に使用されたもので、中学や師範学校の文法教科書として適当と評している。また、力子の序によれば、本書の特徴として動詞の記述に精細さがある点だと述べている。



本書書影

2. 本書の内容について

それでは本書の内容を概観し考察を進める。本書は三篇からなる。第一篇は概論で文と語、文成分、更には「標點符號和標點法」という句読点などの使い方について述べている。第二篇は“詞底專論”として単語を品詞ごとに分類した上で詳細な記述をしている。第三篇は“句底專論”として文の種類や文成分について記述している。

さらに各篇の内容について見ていこう。第一篇は概論で3つの節からなる。初めの節は“句、詞”で文や語などを概説している。その中で文を「言語を書き、見える形とするのに文字がある。文字を組み合わせ、そこに語気を加えたものを文と呼ぶ」^[2]（孫俚工 1921：1）と定義し、その上で文には平叙文を指す“直述式”、疑問文を指す“疑問式”、命令文を指す“命令式”、感嘆文を指す“感嘆式”（以上は孫 1921：2）があるとしている。次に品詞を“名詞”“代名詞”“動詞”“形容詞”“副詞”“介詞”“接續詞”“助詞”“感嘆詞”の九種類に分類している。

孫俚工は第二節で“主詞 表詞 止詞 足詞 分句”（孫 1921：9）と題して文成分について説明をしている。孫俚工は「文の構成には大きな二つの骨格がある。一つは主詞；もう一つは表詞である。」（孫 1921：9）と述べている。“主詞”は「文の中で動作の主体を表す。」（孫俚工 1921：9）と定義し、「[我] 來了。」（私が来た。孫 1921：9）という例などを挙げ、「表詞」については「主詞が発出する動作」（孫 1921：10）と定義し、「先に挙げた例文の“來了”（来た）がそれに当たる」（孫 1921：10）と述べている。つまり、“主詞”は主語であり、“表詞”は述語を指すのである。さらに孫俚

工は“止詞”について「止詞として用いる語は必ず名詞或いは代名詞であり、その動詞は必ず「外動」でなければならない」と述べている。“外動”はそのあとの説明を見ると外動詞を指すことが分かる。孫俚工は“止詞”の例として“他停 [工]。”（彼は作業を止める。孫 1921：10）などの例をあげ、「上記の例の [] で表したものが全て止詞で、外動詞“做”^[3]などの後ろにつく。」（孫 1921：10）と述べている。つまり、この“止詞”は目的語を表しているのである。孫俚工は“足詞”について「また補足語とも呼ぶ；動詞の後ろに止詞を伴ったとしても、語気が完全ではない場合、その後ろにさらに補足をする語を加える。これが「足詞」である」（孫 1921：10）と述べ“他做工 [很苦]！”（彼は働いて苦勞をしている！）、“他買筆 [送我]。”（彼は筆を買って私に送る。いずれも孫 1921：11）等の例を挙げ、[很苦] [送我]を“足詞”としている。連動文^[4]を表すようであるが、文の意味を補足する成分を“足詞”と呼んでいるのである。最後に孫俚工は“分句”について述べている。“分句”には①名詞として用いる名詞性の“分句”、②形容詞として用いる形容詞性の“分句”（いずれも孫 1921：11）、③副詞として用いる副詞性の“分句”（孫 1921：12）の三種類があるとしている。例文を見ると①については「[贊成“工學主義”的]，就應該實行做工。」（工學主義に賛成するのであれば、働くことを実行しなければならない。）「[誰願意犧牲]，就去犧牲。」（犠牲になりたいと願う人が犠牲になりに行けば良い。いずれも孫 1921：11）などの例文を挙げ、「このタイプは「主詞」で多く使われる」（孫 1921：11）と述べている。②について孫俚工は「[世界上想發財的] 人，不要做夢了。」（世の中で金持ちになりたい人は、夢を見てはいけぬ。孫 1921：11）等の例文を挙げ「この用法は多くが「主詞」あるいは「止詞」につく」（孫 1921：12）と述べている^[5]。また、③については“一輪電車 [風馳電掣地] 去了。”（ある路面電車があつという間に行った。孫 1921：12）等の例を挙げている。以上の記述を見ると“分句”はフレーズを指すようである。孫俚工は第一篇の最後第三節を“標點符號和標點法”とし、「。」「，」などの句読点などの符号や固有名詞を表す下線“_____”さらには書名を表す波線“~~~~~”などの用法を説明している。

第二篇は“詞底專論”と題し、品詞について記述している。一つ目の品詞として孫俚工は名詞を立てている。孫俚工は“(Ⅰ) 名詞底種類”（名詞の種類）と題し、名詞を“私名”（固有名詞 孫 1921：27）と“公名”（一般名詞 孫 1921：27）とに分け、それぞれ例を挙げている。次に“(Ⅱ) 名詞的位次”（名詞の格）として名詞の“位次”（格）となるものに“主位（主詞）”（主格 孫俚工 1921：29）、“目的位（止詞）”（目的格 孫 1921：30）、“附加位”（属格 孫 1921：30）があるとしている。ついで孫俚工は“(Ⅲ) 名詞底構造”（名詞の構造）と題して“婚姻”“法律”のように「同義字の並列によってできた名詞」、「大小」“父母”のように「反義語を並べることでできた名詞」（いずれも孫 1921：32）など全部で6種類の名詞の構造を挙げている^[6]。

二つ目の品詞として孫俚工は代名詞を立てている。初めに代名詞の種類として“人称代詞”（人称代名詞 孫 1921：35）、“指示代詞”（指示代名詞 孫 1921：38）、“約指代詞”（例から見ると不定代名詞にあたる 孫 1921：41）“詢問代詞”（疑問代名詞 孫 1921：42）、“承接代詞”（“的” 孫 1921：43）の五つに分け、人称代名詞と指示代名詞については名詞と同様に格について述べている。^[7]さて、人称代名詞について孫俚工について三人称を「男性」「女性」「通性」「中性」の四種類とし、男性は“他”、女性は“伊”、通性は“佢”、中性は“彼”がそれぞれ使われるとしている。この点については後節でさらに触れたい。

孫俚工は三つ目の品詞として動詞を立てている。孫俚工は動詞には“外動”（孫 1921：45）、“内動”（孫 1921：47）、“同動詞”（孫 1921：48）、“助動詞”（孫 1921：49）があると述べている。“外動”は他動詞、“内動”は自動詞、“同動詞”は「動作を表すことのできない述語は、全て同動詞と呼ぶ。なぜならこれらは文法的作用が動詞と同じだからである。」（孫 1921：48）とし、“是”（「～である」との意）“有”（ある）などをその例としている。助動詞については“能”（能力が備わりできる等の意）、“會”（学習してできる等の意）、“應該”（しなければならないなどの意）、“要”（するつもりなどの意）などをその例としている。田村 2009:15 によれば「初期白話文法群」の助動詞に分類されるものについて能願動詞だけではなく方向補語や結果補語、受身など、諸氏より異動が大きいのが、孫俚工に関していえば能願動詞のみを助動詞と考えている事が分かる。次に孫俚工は“動詞底變化”（動詞の変化）として、現在や過去といった時制を記述している。その次に孫俚工は“散動詞”について記述している。孫俚工はこの“散動詞”を「一つの文や句の中で主要な動詞として用いない動詞があり、それを散動詞とよぶ。」（孫 1921：62）と定義し、“他到各地 [旅行], [研究] 語言學和考古學的種種問題。”（彼は各地に行つて旅行し、言語學と考古學の様々な問題について研究する。 孫 1921：62）等の例を挙げている。孫俚工はこの“散動詞”の説明の中で「“來”“去”の二字はある時は傍らの動詞（連副詞）の後にあつて、離合する複合動詞を構成する。例えば“他把那個千斤石 [舉起來], 又 [放下去了]。”（彼はあの 1000 斤の石を持ち上げ、また下ろした。）のようになだ。」（孫 1921:68）と述べている。孫俚工はこの例文で使用した“舉起來”について“他 [舉起] 那個千斤石 [來]。”（孫 1921：68）のような例も挙げている。これは複合方向補語について述べているのである。ついで孫俚工は外動詞、自動詞、同動詞に分け動詞の置かれる位置について述べている。例えば外動詞は「主詞 - 外動 - 止詞」のように置かれ、“我 [喝] 酒。”（私はお酒を飲む。 孫俚工 1921：71）のように語順とその例文を示している。動詞を論じた節の最後で孫俚工は名詞で論じたように動詞の構造についても論じている。動詞の構造には「同義字を合わせて作ったもの」など五つをあげている。この中で5番目の構造として「単音節あるいは複音節の動詞の後ろにさらに助動詞あるいは副詞を加

えたもの」(孫 1921 : 75) というのを挙げており、四種類あるとしている。一つ目は“得”をつけるもので、“他〔走得〕路。”(彼は道を歩くことができる。)の様な例を挙げ可能や程度を表す(孫 1921 : 75)もの、二つ目は“着”を付けたもので動作が未完了であることを表し“他〔坐着〕寫字。”(彼は座って字を書く。 孫 1921 : 76)を例としてあげている。三つ目は“過”や“了”を加えたもので動作が完成している意味を表すとし“……………到今〔考過〕二十餘次。”(……………今に到るまで受験すること 20回あまり。 孫 1921 : 76)のような例を挙げている。四つ目は副詞あるいは介詞にさらに“來”や“去”を加えたもので、“走過來”(やってくる 孫 1921 : 77)の様な例を挙げています。

孫俚工は4番目の品詞として形容詞を立てている。形容詞を“小”(小さい)、“好”(良い)といった“性態形容詞”(性質形容詞)、数字や“幾”(いくつ)“餘”(あまり)といった数に関する“數量形容詞”(数量形容詞)、“這”(この)“那”(あの)といった“指示形容詞”(指示形容詞)、“什麼”(何の)“哪”(どの)といった“疑問形容詞”(疑問形容詞)に分類している。性質形容詞には“(前略)是一件〔做不到的〕事”(やりおおせない一つのこと 孫 1921 : 80)という例などがあり、また通常指示代名詞に分類されるものが指示形容詞に分類されることから、名詞を修飾するものは等しく形容詞と考えた事が窺える。次に孫俚工は形容詞の比較の用法について述べている。孫俚工は比較について“平比”(孫 1921 : 83)“差比”“極比”(いずれも孫 1921 : 84)の三種類があるとしている。例文などを見るとそれぞれ原級、比較級、最上級を指すことが分かる。さらに孫俚工は形容詞の置かれる位置について述べている。名詞の前か名詞の後ろかという分類であるが、名詞の後ろの例を見ると、“兩方是灣港底入口, 水〔狹而深〕, 岸〔促而高〕。”(兩側は港の入り口で、水は狭くて深く、岸は迫っていて高い 孫 1921 : 85)という例を《少年底悲哀》^[8]から引用している。このことについての説明はないが、動詞と考えたという記述がないことから想像すると、孫俚工は形容詞が述語となる事ができると考えていた可能性があるのではないだろうか。孫俚工は名詞や動詞と同じく「同義語が組み合わせられたもの」のように形容詞の構造については六つあると述べている。そのうちの一つは“由他詞轉成的”(ほかの語から転用されているもの 孫 1921 : 86)とし、その例として“〔雨〕衣”(レインコート)“〔手〕套”(手袋 いずれも孫 1921 : 86)など名詞から形容詞となったもの、“〔流〕水”(流水)“〔落〕花”(落花 いずれも孫俚工 1921 : 87)のように動詞から形容詞となったものの例を挙げています。

孫俚工は五つ目の品詞として副詞を立てている。ほかの品詞と同様にまず副詞の種類として“時候副詞”(時間副詞 孫 1921 : 90)、“地位副詞”(場所副詞)、“性態副詞”(状態副詞 以上二種は孫 1921 : 93)、“數量副詞”(数量副詞 孫 1921 : 94)、“然否副詞”(否定副詞)、“疑問副詞”(疑問副詞 以上二種は孫俚工 1921 : 97)の六種類に分類でき

るとする。次に“副詞底作用”（副詞の作用）について述べている。孫俚工は副詞の作用として①動詞に伴うもの、②形容詞に伴うもの、③副詞に伴うものの三種類に分類している。①の動詞に伴うものについては、さらに動詞の前に置くか後ろに置くかで分類をしている。動詞の後ろにある副詞は“(前略) 都照得 [通明] 了。”(大変明るく照っている) “霧氣升得 [很高了] (後略)” (霧が空高く上がっていく いずれも孫 1921:99) の様な例を挙げている。様態補語や程度補語をも副詞と考えたようである。最後に孫俚工はほかの品詞と同様に副詞の構造について同義語の組み合わせなど全部で五つの構造を挙げている。この中で最後の五つ目を“分句 (或兼詞)” (フレーズ (或いは兼詞)) とし、“到這時候” (この時にいたって 孫 1921:103) 等の例を挙げている。

孫俚工は六つ目の品詞として介詞^[9]を挙げている。まず、介詞を「前置介詞」(孫 1921:106) と「後置介詞」(孫 1921:109) の二種類に分類している。この前置介詞は介詞である。「初期白話文法群」の中には例えば楊樹達のように介詞をその働きによって分類する場合が多いが、孫俚工は特にその働きによって分類はしていない。後置介詞は「通常仲介する語 - 名詞あるいは代名詞 - の後に置かれる。後置介詞はどのような名詞や代名詞の後だとしても全て“底”を用いる。」(孫 1921:109) と述べている。現代語の構造助詞を後置介詞としているようである。

孫俚工は七つ目の品詞として接続詞を挙げている。孫俚工はまず接続詞を“等列接続詞” (等位接続詞) と“主從接続詞” (従位接続詞) に分けている。孫俚工は等位接続詞をさらに①“平接”、②“承接”、③“轉接”、④“推接”、⑤“選接”の五つに分けている。例文などから考えると①は並列、②は累加、③は逆接、④は付随、⑤は選択をそれぞれ指しているようである。また、従位接続詞は①“因果”、②“假設”、③“推拓 (或讓歩)”、④“比較”の四種類に分けている。例文などを見ると①は原因、②は仮定、③は条件 (或いは讓歩)、④は比較を指すようである。

八番目の品詞として助詞をたてている。孫俚工は助詞を“決定助詞” “疑難助詞”の二つに分類している。いずれも語気助詞を指しているが、“決定助詞”については「了」の字。(動詞の変化を参照せよ) (孫 1921:121) とあり、アスペクト助詞の“了”も含んでいる。“疑難助詞”も語気助詞だが、語気助詞のうち疑問を表すものをこの“疑難助詞”に含まれる。

九番目の品詞として感嘆詞を立てている。孫俚工は感嘆詞を「驚き」や「よろこび」など感嘆詞の表す意味によって7種類に分類している。以上で第二篇は終わることとなる。

第3篇は“句底專論”として単文と複文また文の構造について述べている。孫俚工は単文を「一つの文の中に主語と述語が一つずつあるものを単文と呼ぶ。」(孫俚工 1921:131) と定義している。その定義の後、周作人が翻訳したイギリス民謡を使用し主語と述語に分ける練習がついている。ついで複文について述べているが、孫俚工

は複文を“主従複句”（孫 1921：135）、“衡分複句”（孫 1921：138）、“包疊複句”（孫 1921：140）に分けている。例文を見ると“主従複句”は主従複文、“衡分複句”は連合複文、“包疊複句”は挿入句を指していることがわかる。次に孫俚工は文を構成する要素について「“主詞”（主語），“表詞”（述語），“主詞底附加語”（主語の修飾語），“表詞底附加語”（述語の修飾語）の四種類がある。」（孫 1921：147）と述べている。その上で主語になる事のできる品詞を（a）名詞、（b）代名詞、（c）形容詞、（d）動詞、（e）名詞句の五つとしている。このように分けた後、孫俚工は主語の位置について述べている。「主語は述語の前だが、自動詞や同動詞について、主語は述語の後ろにある」（孫 1921：150）と述べている。孫俚工は“海底有[潜水夫]”（海底に潜水夫がいる。）、“(前略) 進來了一個十七八歲的[少年]”（一人の17、8歳の少年が入ってきた。いずれも孫 1921：150）等の例を挙げている。存現文については主語が述語の後にあると述べているのである。さらに孫俚工は主語の省略についても述べている。ついで、孫俚工は述語について述べている。孫俚工は「述語には三つの部分がある。主要なのは動詞でその後に目的語や補足語がある。」（孫 9121：152）と述べている。中国語の述語について主要なものは動詞であると述べているが、この記述からは形容詞が述語となるとは考えたか否かを窺い知ることはできない。次に主語の修飾語について形容詞、名詞や代名詞の後ろに“底”のついた所有の性質をもつもの、名詞と同格のもの三種類があるとしている。名詞や代名詞の後ろに“底”のつくものについて孫俚工は「名詞の後ろにもし“的”がついたならば、それは形容詞として使われている」（孫 1921：157）と述べている。“底”と“的”の違いに言及をしている。最後に孫俚工は述語の修飾語について述べている。述語の修飾語には(A)時間、(B)場所、(C)程度、(D)動作の状態、(E)原因、(F)比較、(G)逆接の七種類があるとしている。(C)の程度について孫俚工は「副詞あるいは副詞句で“得”の字が導く。」（孫 1921：161）と述べ『老殘遊記』から“這幾個人早已嚇得[魂飛魄散]了。”（この何人かの人はとくに魂も消え入るほどに驚いた。孫 1921：161）等の例を挙げている。このことから、孫俚工は様態補語を副詞と考えていることが分かる。

以上本書の内容について見てきたが、力子の序にあるように動詞の記述は確かに詳細であった。また、名詞や代名詞、形容詞、副詞についても細かく記述がされていた。一方で助動詞や介詞については簡潔な記述となっていた。

3. 孫俚工の記述について

次に 1920 年に出版された下記の「初期白話文法群」の記述と比較対照することで、孫俚工の記述について考察をして行く。

- ①呂雲彪など 1920.4『白話文做法』太平洋学社。全 210 頁。
- ②蔡曉舟 1920.5『国語組織法』泰東図書局。全 101 頁。

- ③陳浚介 1920.8『白話文文法綱要』商務印書館。全 73 頁。
- ④李直 1920.8『語体文法』中華書局。全 91 頁。
- ⑤王應偉 1920.10『實用國語文法 上卷』商務印書館。全 194 頁。
- ⑥馬繼楨 1920.11『國語典』泰東圖書局。全 152 頁。
- ⑦楊樹達 1920.11『中国語法綱要』商務印書館。全 78 頁。

3.1. 文成分と文型について

まず文成分と文型について考察を行う。龔千炎 1997: 61 によれば孫俚工がはじめて主詞や表詞などを使い七つの文型を示したとする。確かに孫俚工は文成分として“主詞”“表詞”“止詞”“足詞”“分句”(いずれも孫俚工 1921: 9)を定め、孫 1921: 131、133、143、144 においてこれらの文成分を利用して文型を示している。しかし、筆者が数えたところ文型の数は六つであった。

ところで、文を構成する要素に言及したのは孫俚工がはじめてではない。呂雲彪などを見ると文を構成する要素として「主語」「説明語」「客語」「補足語」(呂雲彪など 1920: 111)を挙げている。「説明語は語句の中で主語の動作や状態を説明する語で、動詞や形容詞などでできる」(呂など 1920: 111)と述べている。さらに主語+説明語など 4 種類の文型がある(呂など 1920: 111)としている。

蔡曉舟は 9 種類に分けた品詞をその性質から 3 種類に分けた。そのことについて「第三類の動詞は全てのものの動作を表し、第四類の形容詞は一切のものを形容する、第五類の副加詞(執筆注 副詞を指す)は動詞と形容詞に付随して使う。(中略)これらを「第二種詞」とする。」(蔡曉舟 1920:59-60)と述べている。さらに蔡曉舟は「[坐][走][笑][大][長][高]は「語幹」という」(蔡 1920:61-62)とも述べている。「語幹」という語を使い述語について述べている。

陳浚介は単文を構成する要素として“句主”“區別屬詞”“謂語”“疏狀屬詞”(いずれも陳浚介 1920: 56)があると述べている。“句主”は主語のことで、“區別屬詞”は主語の修飾語、“謂語”は述語で、“疏狀屬詞”は述語を修飾する語を指す。田村 2022:36 によれば、この四種類の構成要素を表にまとめ文の構造を表しているという。

李直は“你来”(あなたは来る)という例を挙げ、この説明で「[你]は動作主を指し文の中でこの語を主とするので「主詞」とよぶ。「来」は動作主の動作を表しており、文の意味はこの語の説明するところによっている。そこで「語詞」(「語」は説明の意味である)と呼ぶ。」(李直 1920:3)と述べており、主語と述語の区別をしている。さらに李直は動詞について述べているところで、“他是我的朋友。”(彼は私の友達である)、“紅的紙變白的紙。”(赤い紙が白い紙に変わる いずれも李 1920: 22)という例を挙げ動詞“是”(である)“變”(変わる)について、「単独では意味をはっきりと表すことができないので、別の語によってその不足を補う必要がある。これを「補

足詞」という」（李 1920：22）と述べ“是”の後の“我的朋友”、さらには“變”の後ろの“白的紙”を「補足詞」としている。また、“及物動詞”という他動詞について述べた箇所では目的語を“止詞”（李 1920：23）と定義している。その上で文の構成として“主詞”と“語詞”の様な組み合わせを四種類挙げている。

馬繼楨は文をまず“主語”と“説明語”（馬繼楨 1920:87）に分けている。“説明語”について「主語の動作や状態を説明するもので、自動詞、他動詞、形容詞の三種類がこれになる。」（馬 1920：87-88）と述べている。

楊樹達は文を構成する要素について「「主語」と「叙述語」の二つが主要な成分となる」（楊樹達 1920：2）と述べている。

王應偉は文の成分について「文の成分は二つに分かれる。（一）主語 （二）述語」（王應偉 1920：第二篇3）と述べている。

以上文成分と文型について見てきたが、文型に六種類あると述べたのは孫俚工がはじめのように思われる。しかし、「初期白話文法群」がその初めから、文成分について記述し、明示的ではないかもしれないが、文型についても述べていることから、必ずしもこの点に孫俚工の特長があるとはいいいがたい。

3.2. 人称代名詞について

次に人称代名詞について考察する。表1は孫俚工 1921：36を抜粋したものである。三人称である“第三身”が男性、女性というように性により分けられている。興味深いのは通性として用いられるものが“佢”である点だ。《現代汉语词典》第七版によれば方言との記載がある。このことは「初期白話文法群」が記述している言語が均一的なものとなっていない可能性をうかがわせるのである。また表を見て分かるように、孫俚工は「所有格」についても述べている。「人称代名詞は全ての格で使用する」（孫俚工 1921：36）と述べていることから、孫俚工は所有格以外の格についても言及している。しかし、中国語は英語などと異なり人称代名詞には格変化がない。強いて言えば所有格を表す際に“底”を使用することから、これを格変化と考え表1のように記述したのではないだろうか。

表1 代名詞一覧（孫俚工 1921：36）

	單	數	衆	數	所	有	格
第一身	我（我自己）	我	們	我底	我們底		
第二身	你（你自己）	你	們	你底	你們底		
第三身	男性	他（他自己）	他	們	他底	他們底	
	女性	伊（伊自己）	伊	們	伊底	伊們底	
通性	佢（佢自己）	佢	們	佢底	佢們底		
	中性	彼（彼自己）	彼	等	彼底	彼等底	

それでは「初期白話文法群」はどのように人称代名詞を記述して来たのだろうか。呂雲彪などは人称代名詞を“指稱代名詞”と称し“吾”“我”“我們”“你”（いずれも呂雲彪など 1920：69）“你們”“他”“他們”（呂など 1920：70）をその例として挙げている。“吾”は《現代汉语詞典》第七版によれば、「私、私たちの意（多くは主語或いは限定語となる）」と説明があるが、呂雲彪などでは“我盡吾的力量做事情。”（私は私の力を尽くして事に当たる。 呂など 1920：69）という例文を挙げている。

蔡曉舟は伯夷と仲弓の対話から「この“你”“我”“他”は全て代名詞である」（蔡曉舟 1920：11）と述べ、常用代名詞表で人称代名詞として“我”“你”“他”“我們”“你們”“他們”（いずれも蔡 1920：13）を挙げている。

陳浚介は代名詞を“稱代詞”と称し、人称代名詞を“人稱代詞”と称している。それらはまたいくつかに分けられている。一人称は“我”“我們”“咱們”（いずれも陳浚介 1920：9 とし、二人称は“你”“你們”（陳 1920：11）、三人称は“他”（陳 1920：12）^[10]である。なお、田村 2022：38 によれば、陳浚介は日本語の尊敬語・謙讓語・丁寧語の別を意識しているとのことである。

李直は人称代名詞を一人称である“自稱”、二人称である“對稱”、三人称である“他稱”に分け、一人称には“我”“咱”^[11]“我們”“咱們”“我的”“我們的”（いずれも李直 1920：10）、二人称は“你”“你們”“你的”“你們的”（いずれも李 1920：10）、三人称は“他”“他們”“他的”“他們的”（いずれも李 1920：10）をその例として挙げている。その上で、これらの人称代名詞の後に“自己”（自身）が付いたものを“通稱”（李 1920：10）としている。

馬繼楨は人称代名詞を一人称である“自稱”、二人称である“對稱”、三人称である“他稱”、不定をあらわす“不定稱”、疑問を表す“疑問稱”に分けている。馬繼楨が記した表によれば、このうち一人称は“我”“我們”“自”“我輩”“自己”“吾們”“咱”“咱們”、二人称は“你”“你們”、三人称は“他”“他們”（いずれも馬繼楨 1920：8）となっている。

楊樹達は人称代名詞を李直や馬繼楨と同じく“自稱”“對稱”（楊樹達 1920：19）“他稱”（楊 1920：20）に分け、一人称は“我”“我們”、二人称は“你”“你們”（いずれも楊 1920：19）、三人称は“他”“他們”（いずれも楊 1920：20）をその例として挙げている。

王應偉は人称代名詞を李直らと同じく“自稱”“對稱”“他稱”に分けている。王應偉は人称代名詞を多く挙げるだけでなく、陳浚介と同様に“尊稱”と“謙稱”という尊敬語と謙讓語の概念に似た分類も行っている。例えば、一人称単数では“小弟”“鄙人”、複数では“第等”“鄙人等”（いずれも王應偉 1920：第一篇 15）をあげ、それらを謙称とし、二人称は単数では“君”“公”“先生”など（王 1920：第一篇 15）、複数では“諸君”“列位”（王 1920：第一篇 16）などを尊称として挙げている。三人称では単数で“這位”“那位”、複数で“這幾位”“那幾位”（王 1920：第一篇 16）を尊称

としている。さらに王應偉は三人称に“渠”（王 1920：第一篇 16）を挙げており、方言語彙についても人称代名詞と考えている。

以上人称代名詞について見てきたが、孫俚工の分類には性による区別をしていること、さらに所有格をほかのものと区別していることから、「初期白話文法群」の中ではどちらかといえばヨーロッパの言語の記述をさらに強く利用していることが窺える。この点においては、孫俚工自身が日本に留学しているのにもかかわらず、日本語の影響を受けていないことが興味深い。また、方言語彙が記述されていることから、白話文は必ずしも均一なものとなっていない可能性があると思われる。

3.3. 散動詞について

次に散動詞についてみる。孫俚工は散動詞について「一つの文や句の中で主要な動詞として用いない動詞があり、それを散動詞とよぶ。」（孫俚工 1921：62）と定義している。そして、散動詞には「主語として使用される場合」（孫 1921：63）、「動詞の足詞として用いられる場合」（孫 1921：63）、「止詞として用いられる場合」（孫 1921：64）、「介詞の後に介詞の目的語として用いられる場合」（孫 1921：65）に分けている。例文を見ると足詞として使用される散動詞は連動文が多く、散動詞として使用されるものには“來”“去”をはじめとする方向補語がその例として挙げられている。それでは「初期白話文法群」ではどのように記述されているだろうか。

蔡曉舟は散動詞という語は用いていないが、動詞について説明している箇所で「熟語的「動詞」（熟語の動詞）として「動詞の配合字には二種類ある。一つは“出來”“進去”“拿起來”“吃下去”で、配合字と本動字はももとは異なる意味である語だが、一つの動作を表す。なので、熟語となるのである。（以下略）」（蔡曉舟 1920：18-19）と述べている。いずれも方向補語のついた動詞について述べているところであるが、蔡曉舟は配合字といって付属語と考えた。

陳浚介は散動詞という言葉は使用していないが、動詞について述べた箇所では動詞が別の品詞として用いられる“變態”について「動詞が名詞の性質を持つ」（陳浚介 1920:33）と「動詞が形容詞の性質を持つ」（陳 1920:34）の二種類について述べている。

李直は散動詞について次のように定義している。

- (4) 散動詞 文の中で「述語」となる動詞を「坐動詞」と呼び、そのほかの述語とならない動詞を「散動詞」と呼ぶ（坐は“坐實”であり主要の意味である。散は“散開”であり主要でないという意味である）。例えば、“這人跑來了看飛機。（執筆注「この人は走ってきて飛行機を見た」という意味）」においては“跑來”は坐動詞であり、“看”は散動詞であり、“看飛機”が“跑來”の目的であることを表す。もう一つ例を挙げると“做事不是玩

的。(執筆者注 仕事をする事は遊びではない。)"において“做事”は文の主語で散動詞でもある。このような用法も散動詞の用法の一種である。(李直 1920 : 74)

一方で方向補語として使われる“來”“去”などは「助動詞であるが、これらは実詞では副詞あるいは介詞として用いられるが、動詞と結び合わさり一つの動詞を作っているに過ぎない。」(李 1920 : 29)と述べている。

馬繼楨は散動詞について「動詞が文の中で説明語(執筆者注 述語を指す)とならないものを散動詞と呼ぶ。」(馬繼楨 1920 : 106)とし、散動詞が主語となるものとして“讀書是有益的事。”(讀書は有益なことである。馬 1920 : 106)の“讀書”、目的語として“我要看踢球哩。”(私はサッカーを見に行きたい。馬 1920 : 107)の“踢”をその例としている。また、方向補語の“來”“去”に関しては李直と同様に「別の動詞の下に加え、一種の副詞の性質をなしている。」(馬 1920 : 25)と述べている。

楊樹達は「動詞の散動式」として「叙述語(執筆者注 述語を指す)」の動詞とならないものを動詞の散動式という。」(楊樹達 1920 : 36)と述べ、散動式の用法として(1)“吃飯是不容易的事。”(食べることは容易なことではない。)の“吃飯”ように名詞となるもの(楊 1920 : 37)、(2)“讀書人”(書を読む人)の“讀書”のように形容詞となるもの(楊 1920 : 38)、(3)“陶先生竭力的研究語言學。”(陶さんは力を尽くして言語学を研究する)の“竭力”のように副詞となるもの(楊 1920 : 38)としている。

王應偉は“來”“去”といった方向補語を「時の助動詞」(王應偉 1920 : 第一篇 38)としている。

以上散動詞について見てきたが、文の中で述語とならない動詞を散動詞とする点は散動詞に言及した「初期白話文法群」の中では一致した見解となっている。この点は英語のように文の中に動詞が一つのみ存在できると考えていた結果だと思われる。しかし、散動詞として使用される例には諸氏の見解に異動があり、必ずしも統一された見解が無かったようである。このことから孫俚工はヨーロッパの言語研究にそのヒントを得ながらも、中国語の言語としての特徴を考えた結果を記述したのだと言えよう。

3.4. 時制について

次に時制について考察したい。孫俚工は「動詞の変化」(孫俚工 1921 : 51)と題して時制について述べている。孫俚工は時制について「現在」(孫 1921 : 51)と「過去」(孫 1921 : 53)の二つに分けている。現在をあらわすものについては一般的な現在形以外に「動詞の前に“正在”をつける」(孫 1921 : 52)とする動作の進行、完了を表す“了”を伴った「完了した現在」(孫 1921 : 52)、副詞“剛”“就”“才”を使用した「限定した現在」(孫 1921 : 53)に分けている。また、前述の通り動詞の構造を説

明する中で時制に関する記述がある。未来形については動詞での記述はないが、副詞を見ると「時間副詞」（孫 1921：90）があり、ここで現在と過去、未来を表す副詞が挙げられている。孫俚工は動詞と副詞が時制を決める要素と考えていたようである。それでは「初期白話文法群」はどのように考えているのであろうか。

陳浚介は「動詞と時間の関係」として時制を扱っている。現在形は「動字の下に“着”がつく。例えば“我聽着他說話哪。”（私は彼の話の聞いている 陳浚介 1920：32）」と述べている。過去形については「普通過去形は動詞の下に“了”がつく。例えば“他回了家了。”（彼は家に帰った）」（陳 1920：32）の様に述べている。また、特別な過去形として「全過去を表す。動詞の下に“過”を付けたもので、例えば“我會過他一次。”（私は一度彼と会ったことがある）（中略）半過去を表す。動詞の下に“着了”がつく。例えば、“他睡着了。”（彼は眠った）」（陳 1920：32-33）の様に述べている。未来形については「普通未来形は動詞の上に“要”がつく。例えば“我要洗澡。”の（私は体を洗う）」（陳 1920：33）の様に述べている。

李直は時制を示すのは動詞ではなく副詞であるとしている。過去を表す副詞は“従前”（以前），“起初”（最初 いずれも李直 1920:31）などで、現在を表す副詞は“現在”（今），“如今”（今のところ いずれも李 1920:31）など、また未来を表す副詞は“就”（じきに），“一會兒”（まもなく いずれも李 1920：31）などとしている。

馬繼楨も同じように時期副詞が時制を表し、現在を示す副詞として“當下”（すぐさま）“如今”“現在”（いずれも馬繼楨 1920：38）など、過去を示す副詞として“従前”“起初”“原來”（もともと いずれも馬繼楨 1920:39）、未来を示す副詞として“將要”（まもなく～しようとする）“快”（まもなく～する 以上二つは馬 1920:40）“臨”（～しようとする 馬 1920：41）を副詞の表の中で挙げている。

楊樹達も李直らと同様に副詞が時制を示すとしている。しかし、過去・現在・未来のような時制は説明せず、「時を表す副詞」（楊樹達 1920：53）にて“王君已經畢了業麼？”（王君はすでに卒業しましたか。）“他還沒畢業。”（彼はまだ卒業していません。）“明日你要早去上火車。”（明日あなたは早く行って列車に乗りなさい。 いずれも楊 1920：54）の様な例を挙げ“已經”“了”^[12]“還”“明日”“早”を時間を表す副詞としている。

王應偉は「時を表す助動詞」（王應偉 1920:第一篇 38）として、“來”“去”“出來”“起來”“上來”“下來”等の方向補語を助動詞とし、現在動作が開始進行することを表す（王 1920：第一篇 38）と述べている。“過”“着”などは「動作の完了を表す」（王 1920：第一篇 40）としている。副詞において王應偉は「時間の副詞」（王 1920：第一篇 43）にて時制を表すとして“今”“昨日”“明日”などが時を表す副詞としている。しかし、過去・現在・未来の様には分類していない。

以上時制について見てきたが、孫俚工が動詞の形を変えることで時制を表すとした

点は、ヨーロッパの言語の考えを利用しているように思われる。しかし、副詞も時制を決める要素と考えた点で、必ずしもヨーロッパの言語をただ利用するのではなく、中国語独自の特質をも考えた結果を表し記述したのではないかと考える。

4. まとめ

本稿では先行研究がほとんど取り上げることのなかった本書について、その内容を紹介し、その記述を手がかりに「初期白話文法群」と比較対照することで本書の特徴と価値について考察をしてきた。その結果として、本書はヨーロッパの言語の研究を利用しつつも中国語の特質について考慮をした記述がなされていることが分かった。また、代名詞については方言語彙も散見されることから、この時期の白話文は必ずしも均一なものではなかったことが想像される結果となった。このような点で、本書は一定の価値を有しており、当時の状況を知る上で決して無視されるべき著作ではないものと結論づける。

方言語彙についてはさらに本文の例文などに検討を加え結論を出すよう今後の課題としたい。

注

- [1] 詳細不明。
- [2] 特に断りの無い限り邦訳は本稿執筆者による。また、訳文にある下線は特に断りが無い限り本稿執筆者による。
- [3] おそらく“停”か。もしくは例文が“做工”（仕事をする）の誤りである可能性もある。
- [4] 連動文とは一つの文の中に複数の動詞句が存在するものをさす。
- [5] 孫俚工は名詞性と形容詞性で分けて考えているが、“[賛成“工學主義”的]，就應該實行做工。”に関していえば“的”のあとの“人”が省略されているだけとの見方もできよう。
- [6] しかしながら、孫俚工は32頁から33頁に書いて全部で8つの造語法について挙げている。
- [7] 代名詞としている箇所なぜ“人稱代詞”のように“代詞”と称しているのかは特に触れられていない。
- [8] 未見。詳細不明。本書は「初期白話文法群」の中では珍しく、書物など実際に使用された用例から多くの例文を挙げている特徴がある。
- [9] 前置詞と呼ぶこともあるが、本稿では介詞と呼ぶこととする。
- [10] 複数を表す“他們”がないが13頁を見ると複合的なものとして“他們自己”“他們個人”というのがあり、おそらく複数形を表す“他們”は割愛したものと思われる。
- [11] “咱”について説明がないので単独でどのような場合に使われるかは不明。《現代汉语词典》第7版によれば方言で「私」の意で使用されるとある。そこで1995年に語文出版社から出版された《汉语方言词汇》p548“我”を見たが“咱”の用例はなかった。
- [12] 現在ではアスペクト助詞とするのが一般的だろう。

参考文献（本文で挙げた「初期白話文法群」の著作は除く）

龚千炎 1997.《中国语法学史》语文出版社。

林玉山 1983.《汉语语法学史》湖南教育出版社。

邵敬敏 2006.《汉语语法学史稿》商务印书馆。

田村新 2009.「1920年代前半における中国語白話研究について」, 首都大学東京都市教養学部人文・社会系『人文学報』418: 1-18。

——— 2023.「陳浚介『白話文法綱要』に関する一考察」, 大東文化大学語学教育研究所『語学教育研究論叢』40: 31-44。